

Title	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ9 まえがき
Author(s)	桃木, 至朗
Citation	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ. 2013, 9, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/25905">https://hdl.handle.net/11094/25905</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# まえがき

この報告書は大阪大学歴史教育研究会の活動報告書の第 9 冊で、同時に現在展開中の科学研究費プロジェクト「最新の研究成果にもとづく大学教養課程用世界史教科書の作成」（課題番号 23242034、基盤研究（A）、平成 23-25 年度。代表：桃木至朗）の成果報告を兼ねる。

この科研費プロジェクトは、最初に近代世界システムとグローバル経済史、中央ユーラシア史、世界史と日本史の連結など大阪大学歴史教育研究会がこれまで取り組んで実績を上げてきたテーマのまとめをおこなったのちに、科学技術と環境や自然災害、ジェンダー、新しい文化史などの新領域に取り組み、従来同様の解説や授業実践報告を作成するだけでなく、最後に全体を総合して新しい大学教養課程用の世界史教科書を作ろうと企てたものである。大学用の歴史教科書というと、歴史を学ぶ意義を抽象的に述べたものか、著者が専門とする歴史と研究方法の断片を紹介するものが大半である現状で、世界史の骨組みを簡潔だが通史として叙述し、新しい方法や理論、問題領域にもふれ、読者への問いかけや課題を盛り込んだ教科書ができれば、その意義はきわめて大きいと自負している。日本学術会議の提言「新しい高校地理・歴史教育の創造——グローバル化に対応した時空間認識の育成」（<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/division-15.html> 2011 年 8 月 3 日）にもとづく新科目「歴史基礎」の検討など、高校歴史教育の議論にも応用が可能と考える。

ここで、科学研究費のメンバーと分担を紹介しておこう（所属・職名は現在のもの）。

代表：桃木至朗（大阪大学文学研究科教授） 研究総括・教科書編集

研究分担者：秋田 茂（大阪大学文学研究科教授） グローバルヒストリー、教科書編集

荒川 正晴（大阪大学文学研究科教授） アジア史の位置づけ、教科書編集

飯島 渉（青山学院大学文学部教授） 環境の世界史

飯塚 一幸（大阪大学文学研究科教授） 日本史の位置づけ

伊川 健二（大阪大学文学研究科招聘教員） 世界史と日本史の接続

市 大樹（大阪大学文学研究科准教授） 日本史の位置づけ

内野 花（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任講師）  
文化の世界史

栗原 麻子（大阪大学文学研究科准教授） ヨーロッパ史の位置づけ、  
教科書編集

堤 一昭（大阪大学文学研究科教授） アジア史の位置づけ

中村 薫（大阪大学文学研究科招聘教員） 高大連携と歴史教育

中村 武司（弘前大学人文学部准教授） ヨーロッパ史の位置づけ

連携研究者：杉本 淑彦（京都大学文学研究科教授） 文化とメディアの世界史  
                  三成 美保（奈良女子大学生活環境学部教授） ジェンダーの世界史  
主要研究協力者：小林 克則（NPO 法人神奈川歴史教育研究会副理事長）  
                  大西 信行（中央大学杉並高等学校教諭）  
                  笹川 裕史（大阪教育大学附属天王寺中学校・高等学校天王寺校舎教諭）  
                  庄司 春子（同志社中学・高等学校教諭）  
                  吉嶺 茂樹（北海道有朋高等学校教諭）  
特任研究員：岡田雅志、中村翼、森本慶太

以上のメンバーが、大阪大学歴史教育研究会に参加しているその他の大学・高校教員、ポスドク研究者や大学院生による事務局などと協力しながら、研究活動を進めているのである。

大阪大学歴史教育研究会の月例会は、大学院の演習を兼ねており、毎年秋～冬に受講院生のグループ発表をおこなっている。本冊は昨年度の院生グループ発表を報告書にしたものである。中高教員志望の院生だけでなく、研究者志望の院生にとっても、こうした発表や月例会での高校教員との討議が有益であることは、再三再四述べてきたところであるが、昨今の教員採用やポスドクの大学専任教員としての就職状況は、この研究会＝演習の有効性を証明するものと考えている。

最後に、本冊のもとになる報告をされた皆さん、それに面倒な編集作業を担当していただいた大阪大学特任研究員の森本慶太氏に、厚くお礼申し上げたい。

2013年7月 桃木至朗